
Night Class2-A

琴瀬 裕依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

N i g h t C l a s s 2 - A

【Nコード】

N 6 7 0 8 Q

【作者名】

琴瀬 裕依

【あらすじ】

学校行事【3泊4日ハワイ修学旅行】ハワイ行き便が不運にバードストライクに遭い、シートベルト着用をしまった主人公レイピア・レイエスが頭を強く打ち意識不明の重体に陥った。ふと目覚めると場所は何故か保健室でいた。気がついた保健医は彼女を見た瞬間驚いた。胸に輝く紫色の十字架を持っていた。その十字架は恐るべき能力を持っていた！何も知らないレイピアをいつ地獄へ落とされるのを待っていた

第1話 1 - 3 【すべてはここから…】

ここは、どこ？

私はあの3泊4日の修学旅行ハワイ行きの便に載っていたのに。
どうして保健室にいるんだろう？

なにがあつたんだっけ？

…ダメだ、何があつたのか思い出せないや…。
あれ？どこからか声がする…

お母さん？お父さん？

ううん、違う。お母さんとお父さんの声じゃない。

この声は知らない人の声…

「…ということ、…リア、この子をクラ…まで…」
何を言ってるの？聞こえないよ…。

もう少しだけ声を大きくして…

ドサッ！

「ん？何の音かしら？」

「もしかして、今日来たばかりの子ですか？」

「たぶん…」

慌てて保健医の教諭が彼女の眠っているベッドへ向かった。
そこにはベッドから落ちてしまったせいで、頭がズキズキと痛んでいた。

「あなた、大丈夫！？」

「はい…大丈夫じゃないですう…」

「あっちゃあー。たんこぶできて…えっ？」

保健医は言葉を失った。彼女の胸に輝く紫色の十字架が首にかけられてあった。

（この子、さっきまで所持してなかったのに…まさか…）

「先生？」

「へっ！？」

保健医は我に返った。すぐさま袋に氷と水を入れて彼女の頭を冷やした。

冷たいのは当然だが、しばらくの間はガマンするしかなかった。すると保健医は机から何やら書類をとり始めた。

そして彼女にこう告げられた。

「さて、あなたにいくつかの質問をするね。簡単なことなので難しいことは考えないでね」

コクリとうなずく彼女。これと同時に簡単な質問が始まった。

「名前と生年月日を教えてください」

「レイピア・レイエス。8月6日」

「血液型は？」

「A型」

「ふむふむ…」

質問の答えをスラスラと書類に書く保健医。

レイピアと名乗られた彼女に先ほどからあの紫色の十字架が気になっ
てしょうがない。

言っているのか言わなくていいのかは迷う保健医。

「えっと、質問はこれくらいでいいわ」

あっさり面接は終わってしまった。

「え？ たったこれだけ？ 」と驚くレイピア。

「それにしてもA型かあ。 Blood Type A Class。」

あ、言い忘れた。あなた^{とわい}の年齢は？」

「とわい？」

「年齢のことよ」

「14歳ですけど？」

「14歳：てことは中学2年生ね？」

「はい、そうです」

忘れないように書類に記入した。 2nd Blood Type A Class と。

「さーで、今日は遅いし同じクラスで生徒会長である子に寮まで案

内してあげるからね」

と強引に腕を掴み、廊下へ連れ出された。

当然大人の握力なので痛いのは当たり前だ。

「ロベリアー！長い時間の間待っててごめんなさいね。レイピアを寮まで案内させてちょうだい」

「わかりました」

とまた強引に掴まれズルズルと引きずられていった。

まるでレイピアを死体扱いに振り回されていた。

2人を見送った保健医はまだレイピアの所持していたあの紫色の十字架。

まだ気になって気になってしょうがなかった。

（この学園の創始者、シェリー・コルネットと同じ色の十字架であり、2重人格の恐るべき能力があるとか聞いたことがあるけど…まさか！！）

青ざめる保健医。あの十字架は創始者シェリーの血が引いているのか？

もしもそうであれば…

（調べる価値がありそうだな…）

不意に不気味な笑顔で笑い、鎖で巻かれた十字架を手に取りただ単に見つめているだけだった。

その頃、2人は寮へ到着した。

管理人から新しい部屋のカードキーをもらい、最上階の部屋へと向かった。

「ここ、何階まであるの？」

「25階まであるわ。レイピア運がいいわね」

「へえ…」あの、ロベリアさんは何組ですか？」

恐る恐るロベリアに聞いてみた。相変わらず冷たい口調で

「レイピアと同じA組よ」

「そ、そっか。よろしくね」

会話が終わってしまった。この気まずい空気を何とかしないと、何

か話題を作らなければと思った瞬間：

『最上階です』

「えっ!?!」

いつの間にか最上階に着いていた、しかも一緒に乗っていたロベリアまでもいない。

「ええゝ…ちよつとおゝ…最上階つてたった一箇所しか部屋ないじやん…」

グチグチ言いながらカードキーをかざして、ロック解除の音が入った。

すると…玄関を見ると知らない男の靴が置いてある。

まさか男女共同寮なのか!?!と恐る恐るリビングへ向かった。そこにいたのは。

「えええっ!?!」

「んー?」

レイピアは驚いた。リビングで日本のお笑いテレビ見ながら海苔^{のり}つきせんべいを食べていた若い大人の人がくつろいでいた。

第1話 2・3 【すべてはここから…】

まるで人の家に勝手に上がりこんでは、こうやってテレビの電源を入れてダラダラと過ごしているダメな大人は何度か見たことがある。

「あ、あゝ…お前か、保健室で寝ていた。シャロンから聞いたぞ」

体をゆつくりと起こして、レイピアの全身をジロジロと見る。

その目線は明らかに変態目線。

「突然ですまねえ。オレは2nd Blood Type A Class? 何それ??」
セカンド ブラッド タイプ 干 ク

「あ、あゝ…お前か、保健室で寝ていた。シャロンから聞いたぞ」

「あ、あゝ…お前か、保健室で寝ていた。シャロンから聞いたぞ」

「あ、あゝ…お前か、保健室で寝ていた。シャロンから聞いたぞ」

「あ、あゝ…お前か、保健室で寝ていた。シャロンから聞いたぞ」

「あ、あゝ…お前か、保健室で寝ていた。シャロンから聞いたぞ」

「あ、あゝ…お前か、保健室で寝ていた。シャロンから聞いたぞ」

「あ、あゝ…お前か、保健室で寝ていた。シャロンから聞いたぞ」

「あ、あゝ…お前か、保健室で寝ていた。シャロンから聞いたぞ」

「あ、あゝ…お前か、保健室で寝ていた。シャロンから聞いたぞ」

「あ、あゝ…お前か、保健室で寝ていた。シャロンから聞いたぞ」

「あ、あゝ…お前か、保健室で寝ていた。シャロンから聞いたぞ」

「あ、あゝ…お前か、保健室で寝ていた。シャロンから聞いたぞ」

「あ、あゝ…お前か、保健室で寝ていた。シャロンから聞いたぞ」

「あ、あゝ…お前か、保健室で寝ていた。シャロンから聞いたぞ」

「あ、あゝ…お前か、保健室で寝ていた。シャロンから聞いたぞ」

「あ、あゝ…お前か、保健室で寝ていた。シャロンから聞いたぞ」

「あ、あゝ…お前か、保健室で寝ていた。シャロンから聞いたぞ」

「あ、あゝ…お前か、保健室で寝ていた。シャロンから聞いたぞ」

「あ、あゝ…お前か、保健室で寝ていた。シャロンから聞いたぞ」

「あ、あゝ…お前か、保健室で寝ていた。シャロンから聞いたぞ」

「あ、あゝ…お前か、保健室で寝ていた。シャロンから聞いたぞ」

レイピアはある夢を見た。

暗闇にぽつんと彼女ひとり。

回りは誰ひとりもない。

（ここは、どこ？）

知らない学園、知らない世界。

生きてきた国とは違う世界に彼女はここにいる。

彷徨^{さまよ}ったレイピアはある人物に目が止まった。

（あ、あの人は？）

美しい顔立ちにサラサラのロングヘアで、レイピアと同じ胸に輝く紫色の十字架を身につけていた。

その人は権力争いや抗争を好まない大人しい女性だ。だがその大人しさから一変、別の人格へと変わった。

鋭い目つきで人々を恐怖へ突き落とす。

天使から悪魔へとなってしまった。

（なんで！？なんで人格が変わったの？い、いや…）

「いやぁー……っ！！」

「うるせええーっ！！」

ハリセンで強く叩く人形。しかもサイズは小さいのに素早く動いている。

「あのな、オレこう見えても低血圧なんだぞ？」

「低血圧って、もしかして！」

そう。この人は昨日リビングでダラダラしていた先生であった。

聞けばベイチャーは、ある一定時間が切れると人形の姿に戻ってしまうという変わった呪いなのである。

「って、人が説明してる最中^{さなか}で二度寝すんじゃないよ！起きろよ、学校行くんだぞ！」

人形から人間の姿へ一変し、真っ先に布団を奪い無理矢理にでもレイピアを起こし続けた。

十分後、やっと体を起こしフラフラと立ち上がった。目を擦りなが

男子達は勢いよく一斉に立ち上がった。一部はぼかーんとしていた。女子達も混ざってレイピアを囲み質問攻めした。

「可愛いじゃん!」「なあなあ君どこの国?」「好きな人のタイプは?」などなど聞ききれないほど質問された。

第1話 3 - 3 【すべてはここから…】

これ以上キリがないので、一人づつ質問されたことをテレながら答えた。

次の質問に答えようとしたその時、

「あつ」

「あら、あなたは今朝の…」

そう、今朝校門で声をかけたあの美女。

先輩だと思っただが、まさか同じクラスとは予想もしなかった。

「フィシア、知り合い？」

その美女の後ろにぴょんと入ってくる。これまた可愛らしくキューピットの存在の美女。

「今朝あつたのよ。この世界にやってきてまだ浅いわよ」

「えっ、そうなの!？」

そこまで驚く?と思っただレイピア。

さらにぐいっとレイピアの頭を見て、

「ねえフィシア。この子さ、ロベリアと同じ身長だしゴスロリやコスプレいけるんじゃない？」

「待て待て。レイピアまで巻き込まないでよ」

呆れた顔でため息をつく。

今朝であつた美女の名前はフィシア・クリスタリド。2 - Aのクラス委員を務めるマジメな生徒。もう一人はリース・ジュエル。ゴスロリやコスプレが大好きで、趣味は手作りでファッション雑誌にも載るほどの腕を持つ天才。

こんな天才秀才のいるクラスに入っててよかったのか、少し戸惑いがあった。

「じゃ、5分早いショートホームルームがSHR終わるぞ!それと、フィシアとリース。レイピアを学園の隅々まで案内させる」

リースは「ええ」と面倒くさそうな顔したが、ベイチーが「限定

お菓子買ってくるから」という甘い誘惑に負け、レイピアを引つ張って教室を後にした。

「あんたまた誘惑に負けるなんて…」

「だつてえ〜」

「『だつてえ〜』じゃないわよ〜。全く、彼氏じゃなくて先生までも…」

「あああー！これ以上言わないでーっ！！」

なるほど。リースはお菓子に弱い…。とこっそりメモするレイピア。まだまだ彼女には知らない部屋などたくさんある。一日にでも早く場所を覚えるため持つて来たものだ。時々気になる情報までもメモってしまう。

まずは1階から案内した。A棟は昇降口、学食、保健室、鍵管理室に視聴覚室。移動して次にB棟には応接室、校長室、理事長室とある。

さらに移動してC棟は社会科学習室のみだけ配置されてあった。

「社会科学習室はあまり授業じゃ使用しなくなって、今は物置場所として使用されてるわ」

「そうなんだ〜」

「さて、次は2階へ行くわよ」

3人はC棟の階段から2階へ昇った。

2階のC棟は1年の教室がズラリとある。そこでレイピアは一つ疑問を抱く。^{いだ}

「リース。AとBはともかく、何でOとABつてあるの？」

「最初ココへ来た時、シャロン看護教諭が言われてなかった？血液型がどーのこーのつて」

そつえばそんなことを聞かれていた。やっぱりクラス分けは血液型で決まるのかと半信半疑で思っていた。

「そんな堅い事は置いといて、B棟へ行くよ〜」

B等は職員室、印刷室、相談室、図書館、放送室。A棟は2年の教室と生活指導室、生徒会室。

そして3階へ昇ると、A棟は理科室、家庭科室、PC室、B棟は3年教室と進路指導室。

C棟は誰もがゆったりとできる広いスペースをとったロビー。最後はなんと幾千の星を眺め放題の広い屋上。おまけに二箇所に設置してあるのは巨大な円型噴水。

周りはこちらに埋められた色とりどりの花。季節によって埋め変わるらしい。

また別の名を【夢のガーデンング】と言われている。

「やっぱ、屋上はいいわね」

「そうね。レイピアごめんね、ぐるぐる回って…大体覚えて？」

「まだ慣れてないけど、そのうち生活すれば場所も覚えてくるから」

「やっぱりそうよね。自然に場所を覚えるからね」

「それに3階のロビーはすごかったな。あんなの初めて」

「でしよ！でもほとんどが3年生が占領しちゃってさ、なかなか後輩に明け渡し、て？」

リースが喋るのをやめた。いや、あるものを見て固まっている。

フィシアとレイピアの後ろに、2体の竜がいた。

「2人とも！よけてっ！！」

「えっ！？」

遅かった。二人は竜の火力により受けてしまう。

幸いにもレイピアは軽い火傷で済んだのだが、フィシアは左足に火傷を覆ってしまう。

慌ててレイピアはフィシアの元へ駆け寄る。

様子はあまりも痛々しく、苦しそうな表情だった。

どうしてこんな所に…そもそも何故学園に竜がいるのかさっぱり分からない。

（早く、早くしないと…死んじゃう）

「フィシアは私が応急手当してるから、レイピアは誰でもいいから近くの先生を呼んで！」

もう彼女の耳にリースの声は届かなかった。

その時、胸に輝く紫の十字架が眩しく光っていた。

濃い紫の髪から薄い紫色の髪へと変わり、十字架は剣へ変わる。

その剣を握り締めた瞬間、人格は180度変わった。

「お前、その女を連れてここから立ち去れ」

「はぁ!!?」

「こいつらは、私が殺す」

「な、なに言ってるの!? そいつら準2級の竜なの!? レイピアが相手す…」

グヴァアアアアアアッ!!!!

いつそこにいたのか、竜の両目を切り裂きその次に片方の竜を瞬間に切り裂いた。

そして傷ひとつなく無事に着地した。

そして、元に戻りその場から倒れこんだ。

「あ、レイピア!!」

リースは急いで駆け寄ったが、すでに気を失っていた。

彼女の手元には紫の十字架が置かれてあった。

突然の人格変化により、レイピアの運命が左右する。

それはまだ14歳の少女には過酷で残酷な運命が待ち構えてあった。

第2話 1 - 3 【抜き打ちテスト】

【ナイトコルネット学園放送ニュース】

『今朝8時55分ごろ、屋上にて2体の準2級の竜が現れました。

被害者は2nd Blood Type A Classのレイピア・

レイエス、リース・ジュエル、フィシア・クリスタリートの3名です。

2人は軽い火傷で済みましたが、フィシアさんは左足に重度の火傷を負い、病院に搬送され今検査中の模様です。

現在その竜は何者かの手によって、学園から約15メートル離れた森林の中心部に遺体が発見されました…』

レイピアは急いで学園から総合医学部病院へ向かった。

自分のせいでフィシアを左足に重傷を負わせてしまった。

（早く誰かに助けを呼べばよかった…）

もし手遅れであれば左足を切断となってしまう。

（それに今日私どうしちゃったんだろう？）

2体の竜が現れては身動きがとれず、そのまま立っていたはずなのに。

突然、レイピアの持っていた紫色の十字架が輝き始め、人格と十字架の形が変わってはすぐに薙ぎ倒した。

その後の記憶は一切覚えていない。

準2級の竜たちを、彼女ひとりで倒した。

「あ、レイピア！」

同じクラスのリースが先に病院のロビーにて、彼女の無事を祈っていたのだ。

「リース！フィシアの容態はどう？」

「まだ…」

「ごめんね、私が呼びに行かなかったら…」

「いいのよ。あんな準2級の竜なんてレイピアが倒しちゃったし…大丈夫だって」

「ねえ、あの竜はなんなの？何で学園になんか現れたの？」

「それは…」

重い口で開いたが、まだ新人であるレイピアに告げることはできなかった。

するとある医師がここへやってきた。

「君達がフィシアさんのクラスメートかい？」

「はい」

「俺がフィシアさんの左足を検査したアレックス・フィックスだ。俺の妹が通っている中学部と同じだ。では個室へ案内するから付いて来なさい」

と、スタスタと歩いていく。その次に2人は緊張と不安があり、もうどうしていいのかが分からなかった。

果たしてフィシアは無事なのか…？

「さて、彼女の容態は確かに重傷を負っている。だが今度行っ抜打ちテストは間に合うかどうか分からない。1週間だけ入院する必要があるな…」

「抜き打ちテスト？」

「明日行われる知力と体力と能力の簡単なテストのことだ。詳しいことは担任が言うはずだから」

「そうですか…」

「だから今のところは何も心配しなださ h j gくていいからな」

「わかりました、ありがとうございます」

頭を何度も下げ、2人は個室を後にした。

よかった、無事なんだねとほっとするレイピアとリース。

それにしても先ほど聞いた抜き打ちテストとはいかにも簡単だつてあっさり言われても分からなかったので、学園に戻ったらベイチャーに聞いてみようと思った。

学園に着き真つ先に教室へ行き、ぐったりと腰を落ち着かせた。

もう、このまま寝てもいいやと思った矢先に…。

「じゃ、1校時目は明日やる抜き打ちテストのことで説明すつぞー！」

皆「ええーっ！？」とブーイングする者たちがいた。

そんなに抜き打ちテストが嫌いなのか？と不思議そうにクラスの皆を見つめる。

「昨年度まで『知力』『体力』『能力』の3つ行ってきたが、その肝心の『知力』に使う5教科の内2教科がまだ印刷中のため、来月へ延期になった」

（げ…数学と理科だけわかんないのに…っ！しかも回りは喜んでるし）

「で、『体力』のほうは男女別で行う。なんか中身が違っらしい、ぜ？」

（何故疑問系を…聞かれても困るわ！）

「『能力』のほうは後ほど2階の掲示板にて張られる。自分の場所をメモっておけ」

は…いと面倒くさそうな返事をして、1校時目はまだ15分経たずに終わってしまった。

能力って言うてたけど、皆どんな力があるのだろうか？

レイピアは気になって気になってしょうがなかったのだが…

「あ、レイピア。お前だけ言わないといけない重要な話がある」

「えっ！？」

第2話 2・3 【抜き打ちテスト】

「いいから、生活指導室に来なさい」

「今!？」

レイピアは面倒くさかったが、しぶしぶ生活指導室へ向かった。

生活指導室はB組とO組の間にある小さな個室の部屋だ。クラス

ただテーブルとソファーだけで、あとは何の飾りもない寂しい無地色の世界だ。

「教室じゃあ話づらいし、ここしかないんだよなあ」

独り言言いながらドスンと座るベイチー。レイピアは緊張しながらゆっくり座る。

ピリピリと張り詰めた空気はどうにも慣れない。

「こつちに来て2日しか経過してないし、お前に残酷な運命と覚悟。それとその紫の十字架のことも話さなきゃなんねえからな」

「十字架?」

「昨日からずっと気になってた。その十字架は各惑星に選ばれた者だけが手に入ることのできる十字架なんだ」

「惑星」

「土星、火星、水星、木星、金星、土星、天王星、海王星、冥王星の

うちのお前は【土星】の守護を持つ十字架に選ばれた」

はてなマークがどんどん浮かび上がるレイピア。

「ただそーやって現実逃避してるのはお前だけじゃない。俺の妹とイトコもその十字架に選ばれた。でも今はバカみてーに元気だがな」

「そっなんだ」

「気のない返事だな。でもお前の十字架、この学園の創始者と同じ色だ」

「創始者って誰ですか?」

「後で校長室にある肖像画見ればいいじゃない」

これも面倒くさかった。

後で見ればって言われても行く暇がない。

「あと、今朝のあの準2級の竜を殺^やつたの、レイピアだよな？」
いまさら？と驚くレイピア。

でも何故知っている？とテレパシーのように送る。

「リースがガチガチに震えだしてな、

『れ、れれれレイピアが、がががつ…じゅじゅ準2きゅきゅ倒した、
たたっ』

つてめちやくちゃ怖かったらしいぞ」

（あのおしゃべりめ！！）

「ま、あのまま裏レイピアが現れなかったら、今頃お前ら死んでたぞ」

「物騒なこと言わないでよっ！！」

クッションをわし掴みにして思いつきり投げた。

投げてきたクッションをノーリアクションで受け止めるベイチー。

思わずレイピアの口から「ちっ」と舌打ちをした。

「バカ、落ち着け。あの竜はな【ヒューラッドスィバルドラゴン】
つつてな、絶滅したはずの竜がまだ2体もウロチョロしたらしいんだ。ちなみにどっちもオス」

「へー」

「普段はそんな凶暴なんかじゃないんだよね。原因が今のところ掴めてないみたいだし」

「先生、大事な話ってアレだけですか？」

「大事な話？もーいや、後で」

「はいーーーーーっ！！？」

「だってさ、もうすぐ学食の時間だぜ？」

時計を指差すと、確かにもうすぐ正午になる時間帯だ。

「先に行つてろ。オレはちょっとしたら食堂室行くから」

と、言うので先に生活指導室を後にした。

クラスへ向かうとリースと男子3人と一緒にやってきた。

「レイピアっ！一緒に食べない？」

「ちようどよかった！食べにいくとこなんだ。あれ？あなたは？」

「えへへ、聞いて驚け！彼氏のリチャード・フィリップよ」

いつから付き合ったのか、驚くレイピア。

まだ皆と馴染んでもない彼女はまだ知らないところだけだ。

「と、秀才のリージョン・ブレイブとそのボサボサ頭のブライアン・オーシャン」

「待て、誰がボサボサ頭だ」

「まあまあ、落ち着けよブライアン」

「ねえねえ、今日の献立は何？」

リージョンはブレザーの裏ポケットからプリントらしきものを取り出した。

本日の献立を調べた。

「えーっと…野菜豊富シチュートリュフ入りに魚のムニエル、フルーポンチと期間限定のとりとりプリンだね」

「期間限定の…」

「プリン…ですって!？」

「こうしちゃいられない！先に行って来るわっ！」

「俺も!!」

慌ててリースとリチャードは走って行ってしまった。

たかが期間限定プリンぐらいで口にしたいの？と思った。

「あの2人、期間限定とかお菓子やら聞いたり情報収集して、あーいう風になるんだよ」

「通称【甘党バカップル】」

「へ、へえ…」

なんとなく分かった気がする。今朝校内案内した時ベイチャーが期間限定のお菓子をあげるからとか言って誘惑に負けたのは覚えてる。女子って甘いものに弱い！自分もそうだけど…。

食堂室に着いた3人はリースとリチャードを探した。

「あ、いたぞ」

先に見つけたのはブライアンだ。

彼の後についていくともぐもぐとシチューやらムニエルやらたくさん食べていた。

（なにこの食べっぷりは…お菓子じゃなくてもこんなに食べるの！？）

「なんだよ、腹減ったんならもつと早く先に行けばよかったのに」と呆れて言いながら座るリージョンとブライアン、そしてレイピア。ご飯食べ終われば2時間もの昼休み時間がある。

昼寝でもよし、ロビーで友達とおしゃべりするのもよし、屋上で星をみるのもよし、なんでもいい自由時間だ。

「ねえ、明日抜き打ちテストのことできになったんだけど…能力ってなに？」

「能力？ああ、人それぞれ色んな能力持ってるよ」

「え？どんな能力なの！？」

「あたしは悪夢に陥ってしまった者たちを幸せの楽園へ導く【夢】なの」

「オレは迷える詩人を村まで導く妖精【森】だ」

「で、秀才君は尽きかけた火を暖かく灯す【炎】」

「秀才いうな」

「で、ボサ…あ、いや、ブライアンは邪魔する雲を消し、光る星照らす【空】」

「へえ…」

抜き打ちテストで貰える称号なのか、ある意味かっこいい称号。自分も明日何の称号もらえるのか気になってしょうがない。

「レイピアの称号気になる？」

「といって、自分の称号落ちないようにな」

「落ちないわよ、そういうリチャードは落ちるんじゃないの？」

「オレも絶対落ちねーよ」

「また愛の夫婦が始まったか」

「そうだな。オレは止める気ゼロだ。リージョンが止めてくれ」

「この後オレ課題やんなきゃいけないんですけど」

「その後でやればいいじゃねえのか？」

「誰のせいでオレの部屋に来てゲームしたんだ？」

「うつー!!」

（マジメだ…）

「あ、レイピア。この後何か予定ある？」

「うつん、何にもないけど…」

彼女に近づいて小声で、

「一緒にフィシアのお見舞い行かない？」

「え？課題はやらなくていいの？」

「アレ、嘘^{ジョーク}。だからこっそりココ抜け出してリチャードたちにバレずに行こう」

リージョンにつられるまま、こっそりと食堂室を後にした。

今朝病院に行ったんだけどなあ…。…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6708q/>

Night Class2-A

2011年2月9日14時59分発行